

日本書紀傳

卅二卷
三

和
一〇五二二號

百四十三

内
一
三
六
八
三
號

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (152)
函號	85 1



文庫印

文庫印

文庫印

文庫印

内一六八三號

照太神勅天稚彦曰豐葦原中国是吾兒可王之地也然
 慮有殘賊強暴横惡之神者故汝先往平之云竟有
 其結ハ無ク如ク○葦原中国皆已平竟の平字ハ上
 成ヲ奈何ナ為ル○葦原中国皆已平竟の平字ハ上
 驅除ト有リ照應セ字アリけれバ其意を得て許登
 牟氣衰閑奴と訓ベきあり古事記ナ此を故建御雷
 神返テ上復シ言フ向テ和平葦原中国之狀ト有リ合ハ所
 あれバあり
 トキニ アマ テラス オホミ カミ ニコトクリテアリケルニ シ カラ ハ マサニ
 時天照太神勅曰若然者方
 ベシト アモリヌアガニコ ノリ玉トモリノ ムトスル アモリチアヒタニ ミ
 當降吾兒矣且將降間皇孫

○日本書紀傳三十二

○百七

己生號曰天津彦彦火瓊瓊

杵尊時有奏曰欲以此皇孫

代降故天照太神乃賜天津

彦彦火瓊瓊杵尊八坂瓊曲

玉及八咫鏡草薙劍三種宝

物又以中臣上祖天兒屋命

忌部上祖太玉命猿女上祖

天鈿女命鏡作上祖石凝姥

命玉作上祖玉屋命凡五部

神使配侍為因勅皇孫曰葦

原千五百秋之瑞穗國是吾

子孫可王之也宜爾皇孫

就而治焉行矣宝祚之隆當

與天壤無窮者矣

上文小既而天照太神以思兼神妹萬幡豐秋津姬命配正哉吾勝之速日天忍穗耳尊為妃令降之於葦原中國

是時勝速日天忍穗耳尊立于天浮橋而臨睨之曰彼地未平也其不須也凶目杵之因歎乃更還登具陳不降之狀之有也此國天忍穗耳尊ハ一也國土小降著せ御在坐す為て止ハ一也己ハ皇祖天神の大命を蒙奉りせ給へる上ハ打任せたる天下の天君ハて渡りせ御右一坐す時事の後を以て譬云時ハ國司カどれ任され奉る人の有けるを公事小依て其任國小赴らず在京一其國務を掌り事有りて其國司ある小ぞ等一うりぬ可き然れハ此後ハ皇祖天神の大命を以て天穗日命を巡察使の如く一て天降一給ハ天

推彥神を征伐使_レ為_レて天降_一給_レ以_レ統_レき_レて經津主神
武甕槌神を_ハ大將軍副將軍の狀_レて天降_レさせ給_レへ
る_レも其天忍穗耳尊の大命を相兼させ給_レへる御事
とこそハ思_一けられ其古事記ある事代主神の
御言の語其父大神言_レ恐_レ之_レ此国者立奉天神之御子と
有_レて立奉天神と_ハ云_レば又建御名方神の順_レら_ハせ
給_レへる所_レ此葦原中国者隨天神御子之命_レ獻_レと有_レて
隨天神之命_レ獻_レとハ書_レされず又其天神御使より大國
主神の汝子等事代主神建御名方神二神者隨天神御
子之命勿違白_レ訖故汝心奈何と見え其大國主神の御

答_レ僕子等二神隨白_レ僕之不違此葦原中国者隨命_レ既
獻也_レ申_レさせ給_レへる_レ隨天神之御子之命_レ既_レ獻也_レ
云_レ事_レあり_レを右_レの文_レに任_レぬ_レて略_レけ_レる_レ事_レ准_レふ_レて
知_レべ_レ其事_レ已_レ傳_レ廿一五百九十七丁中委_レく注_レせ
ぬ_レを見合_レせて覽_レる_レ可_レあり若_レて其_レ續_レき_レて唯僕住所者
如_レ天神御子天津日繼所知_レ食_レ登_レ陀流_レ天之御巢_レ而_レ於_レ底
津石根宮柱布_レ刀斯理_レ於_レ高天原氷木多迦斯理_レ而_レ治_レ賜
者僕者_レ於_レ百不足八十_レ垣_レ手_レ隱_レ而_レ侍_レ之所見_レた_レる_レ此_レ天
津日繼所知_レ之_レ登_レ陀流_レ天之御巢_レ而_レ云_レハ此_レ時_レ已_レ天
上_レて天津日繼所知_レ食_レ御在_レ坐_レ其_レ大宮_レの如_レく

△此天忍穗耳尊
の御事お説て明
めたる説共有り
下百四十三下
一

小己命の宮殿を治させ賜ふ可き由を皇祖天神
請奉らせ給へる趣ある事ハ傳世一六百三
か如し此を以て此時の大命を天神御子小出た
云奉の強ざるを思ふ可き事あるふこ
忍穗耳尊ハ其御事依され奉らせ給ひし御時
り始て天下の大君ハ御在し坐する小平國の大
御政ハ何ハも皇祖天神ハ共ハ關係せ御在し坐
ける御事をあむ見奉り知へりける然るを御紀ハ
意味ある御事ハ以り書されし右ハ其
の事共をハ天神御子ハ云すし天神ハ有ハ
補ひて其説を成す者あり若て此ハ時天照太神勅曰

若然者方當降吾兒矣且將降聞皇孫已生号曰天津彦
彦火瓊杵尊時有妾曰欲以此皇孫代降と有る此
狀ハ古事記ハ天照太御神高木神之命以詔太
子正勝吾勝速日天忍穗耳命今平訖葦原中国之白
故隨言依賜降坐而知者尔其太子正勝吾勝速日天
忍穗耳命答白僕者將降裝束之間子生出各天迹^藝志
国迹^志天津日高日子番能迹^藝命此子應降也此御
子者御合高木神之女萬幡豊秋津師比賣命生子天火
明命次日子番能迹^藝命柱也其見えたると文法ハ
相似たりけれハ本ハ一傳あり者と思ふべきを

此の甚く事略て不書れたりける今此一書ゆ足さ
る事を其記ゆ取て少く注さむ右の太子と有る御
紀の皇太子と有をも共し日嗣御子と訓る其義ある
は本よりの事あり然る記傳十五丁の初の詔命の
處の太子と云事を申さずして此の如し申せ
るの初の時未御事依を受給はぬ程ゆて太子の坐
す此の先の御事依を受給ひて太子の坐改ある可し
又云此の如し右の例を奉て論定めたるが如し其
初皇祖天神の詔命を蒙奉りて給へる上は正しき天
降日継ゆて渡りて給ひて此葦原中國の天降りて

御在し坐すと雖も受張たる天皇尊めて渡りて給ひ
けれは常の天津日継を受傳させ御在し坐て天津
高御座の大御位ハ嗣せ御在し坐べき儲の皇子を日
嗣御子と申奉るるごとく異ひて此ハ唯天照大御神
の大御子と申奉る程の事ゆて有べきあり此御天降
段の始ハ天照大御神之命以豊葦原之千秋長五百秋
之瑞水穗国者我御子正勝吾勝ニ速日天忍穗耳命之
所知国言因賜而天降也と有る我御子云々と同一事
ありけれは強て皇太子の字ゆのミハ泥む可くさ
る可き所ありと知べし次ハ今平訖葦原中國之白ハ

經津主神武甕槌神の復命を聞えさせ給へるあり次
小改隨言依賜降坐而知者有ハ御言依ハ一も右小
引る初て御天降の時の詔命已小御在坐ハ故小隨
とガ詔給へるあり此等の御事共を合せ見ると先
小御言依の御事御在坐ける以後ハ此国ハ天降る
せ給はずと虽も高天原小御在坐あぐる小此国土
を所知食す天皇尊の大御位あて御在坐カ故小上
件平国の大御政（ゆゑ）天神御子（之命）を兼て今行給へ
り一御事著りけり此ハ唯天照太御神小對奉り
て御子と聞えさする意味小こそハ御在坐けれ儲

△右の古事
記の文ハ就座
味ハ可き説
有下百三
故天照太神
の所見合す
可

君の心あて太子と書されたるハ非る事を曉りて
然るハ常ハ天津日繼所知者天皇尊の御上
ハ御子と申奉る事小こそ有けれ儲君を
一も皇太子と申あてハ別あるを思ハ儲此一書小
且將降間皇孫已生云と有る御事第二一書ハ天
忍穗耳尊ハ種ハ御事依の御政を過して則以高皇
產靈尊之女号萬幡姫配天忍穗耳尊為妃降之故時居
於虛天而生児号天津彦火瓊杵尊因欲以此皇孫
代親而降故以天児屋命太玉命及諸部神等悉皆相授
且服御之物一依前授然後天忍穗耳尊復還於天と見
えたる此御事共ハ一も己小傳卅一 八百三 小注せる

日本書紀傳三十二 〇百十三

を此の如く描て辨へすは有べし其の此の瓊
二杵尊の生出させ御在り坐る御事ハ一此一書ハ
ハ天忍穗耳尊の天降らせ御在り坐せ給ハ之と為さ
せ給ふ間ハ有り古事記ハ其天降らせ御在り坐
むと為て御装束為させ御在り坐す間ハ有り然る
を第二ニ書ハ右の如く其御装束の御事ハ何と調
ハせ給ハハ一上ハて己ハ天降らせ給へる御道す
ら虚天ハ御在り坐し生奉らせ給ふ任ハ其虚天より
直ハ天兒屋命太玉命及諸部神等を副給ハ其服御之
物をハ其任ハ讓聞えさせ置て大御父天忍穗耳尊

ハ其虚天より還上らせ給へる趣あれども又ハ心行
ぬ事こそハ有けれ其天忍穗耳尊より瓊杵尊の御
方の御讓位の御事ハ然も有べしと雖も其も皇祖天
神の御計ハハを仰ぎ聞えさせ給ひて共ハてハ
物為させ給ハめ然ハて三種神宝ハハを授奉らせ給
ふ御事ハハ其ハ就たる御壽詞等御在り坐せば先
ハ天忍穗耳尊ハ事依り聞えさせ給ハハ御時の如
くハ此度も物為させ給ハハハハ其事委ハハ
傳卅一 八百三ハ注ハ奉れハハ今云限ハ非ハ然ハハ
右の居於虚天而生兒ハ云ハ上ハハ注ハハ如ハ此

小立下天浮橋而臨睨之云々有る初度の御事の混
れより右の御見を生坐る趣の傳はれぬ者として
引引ハ所見たりけれ然る時ハ次度ハ天忍穗耳尊ハ
るを先の傳と混同ハ成て此度ハ座座右ハ坐坐ずして止ぬ
引返ハ昇昇る者ハ如く傳れるあり若て此ハ
故天照太神乃賜天津彦彦火瓊杵尊八坂瓊曲玉及
八咫鏡草薙劔三種神宝と有より以下宝祚之隆當典
天壤無窮者矣おこの事實をハ第一書ハ天忍穗
耳尊の此度の御降臨の御事ハ就て授奉るせ給へる
事ハ書されたりとも右等ハ傳廿一八百三十四下ハ注せる
ハ如く其始て天降るせ御在し坐ける御時の大御政

ありつゝむを同ハ事の相重複れる其一ハ有る例あ
るハ依て其をハ上ハ押上せて考ふ可く此一書ある
ハ初より瓊杵尊ハ授奉るせ給へる御事のハ有て
其天忍穗耳尊の御天降の所ハ更ハ無きハ其片方
を略略るハ事ハ依てハ先皇祖天神
より天忍穗耳尊ハ授奉るせ給へり御事ありハ
此ハ瓊杵尊を代て天降せ奉るせ給ふと為てハ皇
祖天神ハ相共ハ天忍穗耳尊ハ專政専政るせ御在
坐ける御事を見奉り知ハ便宜無一ハ甚味氣無き御
事共あり古事記ハ此一書ハ然ハ異ハざりけれど

是以隨白之科詔日子蕃能迹、藝命此豊葦原水穗
国者汝所知国言依賜故隨命以可天降、又有て其天忍
穗耳尊の奏し請せ給へる任、更に御命を科せ給へ
る由、此豊葦原水穗国者汝所知国、言依賜有ハ其大御
父天忍穗耳尊の御讓を受て此国を所知食す天皇尊
めて渡らせ給ふ可き由、右に引る其上文、尔
天照太御神高木神之命以詔、太子正勝吾勝、速日天
忍穗耳命、今平訖葦原中国之白故隨言依賜降坐而知
省、對へさせ給へる御言、ゆゑを思ふ可し、此所を
深く味ひひ見ざる時、天忍穗耳尊ハ天照太神と瓊

ニ杵尊々の御間、其御血統の御次のニ御在し坐
て天統の御初めて渡らせ給へる御事を申さず、此の
御事依の御事、あども俗に謂ゆる嫡孫承祖と云事の
状、浅はうに思成し奉りて其平国の大御政、更な
も云ず、此時の御讓位の御事、あども凡て皇祖天神のこ
の御計ひの如く思成し疎く奉り如き僻説共も出来
る事、然れ、此天津日繼の御事の上、於てハ
此天忍穗耳尊計り重く辱き、御在し坐
ざるを此所を皇祖天神の御計ひと為るハ、右百
九下以下、論へる古傳の深旨を探知し事能ハざる
ハ賢しき説、 備此ハ三種神宝を事依し授奉らせ給
へるハ、掛出くも甚も可畏き天津日嗣高御座を事依

し授奉りせ給へる大御奎よりて甚しき止事無き
所以有る御事あるが其御事を古事記のハ於是副其
遠岐斯八尺勾璉鏡及草那藝劔亦常世思金神乎力男
神天石別神而詔者此之鏡者專為我御魂而如拜吾前
伊都岐奉次思金神者取持前奉為政此二柱神梓祭佐
久、斯侶伊須受能宮次登由宇氣神此者坐外宮之相
殿神者也次天石戸別神亦名謂櫛石窓神亦名謂豐石
窓神此神者御門之神也次乎力男神者坐佐那縣也
所見たる此三種神室の御事ハ次へ廻りて此ハ其
御伴神等の御事を先注し申べきあり其常世思金神

又聞ゆるハ上ハ下ハ注るが如く天兒屋命の御事
るが此ハ就て古史徴ハ次思金神者取持前奉為政此
二柱神者梓祭佐久、斯侶伊須受能宮と有るハ脱文有
て次思金神布刀玉神者取持前奉為政故此二柱神者
云々有べきありて此第一書ハ後勅天兒屋命太玉
命惟尔二神亦同侍殿内善為防護と有る同トと云る
ハ然る事あり傳廿三 百 下ハ云べし次登由宇氣神
此者坐外宮之度相神者也と有る其書ハ天照太神
又勅曰以吾高天原所御斎庭之穗亦當御於吾兒と有
の合せて説べき事傳廿一 八百四十一丁ハ已ハ注る

が如し次天石門別神者云し此神者御門之神也と有
 八傳十九四百八丁小注るが如く此神の本名を天字
 力雄神と申すを其石門開の御事の御功用に依て天
 石門別神と申奉れを古語拾遺に皇太神を其時新
 殿に遷奉りて令豊磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿
 門と有て其時より御門之神と成りて御在り坐
 るありける若て次天字力男神者坐佐那縣也と有る其
 も傳十九百八十丁小云る事あるが神宮の古記に皇太
 神宮相殿神二座を御戸開神と申して天字力男神萬
 幡豊秋津姬命也と云れ此も其姫神の御名を漏せ

合右の事共を正
 せし小惟ふ証を
 見出たり其八條
 唯命世記皇太神
 の御遷幸の所小
 相殿神天兒屋
 命太玉命御戸開
 神天字力男神萬
 幡豊命御門神豊
 石寛御石寛命
 并二部供神相割
 奉仕候と有る合
 れば此が是と爰
 たき皇神等の御
 賜物に有ける

る事神名式に伊勢国多氣郡佐那神社二座と有るに
 灼然と者あり然して天兒屋命太玉命といも元々皇
 太神の相殿神にて御在り坐ける程天字力男神萬
 幡豊秋津姬命に其佐那縣に御在り坐けるを雄略天
 皇廿二年七月に登由氣大神を外宮に迎申させ給へ
 るあり神託に依て其天兒屋命太玉命の二柱を其外
 宮の相殿にて渡りせ給へる皇御孫尊に陪從へ奉る
 せ給へるより其佐那縣に御在り坐ける御戸開神を
 迎へし皇太神宮の相殿神と為させ給へるが有
 ける此事は古史徴の説實に謂れたる宮の御鎮座の外

△招禱実の義の
 云例の出雲神
 賀詞神礼自
 利臣礼自登云
 と云事有と神の
 礼實臣の臣實
 と云事ありを其
 一ハ自利云ハ
 同例あり若し此
 遠岐斯と事依
 一奉せ給へる
 中ハ

御事を記して依天照大神御託宣相殿坐神二前
 止由氣宮相殿神皇孫命尔奉陪從臣故号止由氣宮相
 殿而東西座東天皇孫命一座西天兒屋命云々太玉命
 云々自尔以往以天手力男神萬幡豐林津姫命天照皇
 太神乃為相殿神坐元是号御戸開神是也と見えたる
 是あり九て外宮の書共ハ偽多しして信難しと
 虽も此ハ正し然して其遠岐斯と聞ゆるハ甚止事無
 き説と聞ゆる
 自由縁の御在り坐す御事ハて宝鏡開始章第一一書
 小思兼神之者有思慮之智乃思而白日宜圖造彼神之
 象而奉招禱也と所見たる是ハて即此時ハ造奉りし
 八咫鏡と八坂瓊曲玉との二種ハ其日神を招禱奉る
 料ハ造て天真賢木ハ掛りし御物ありしハて此(第)等
 の御事共を所聞食一感させ御在り坐て日神ハ一也

天石窟を出させ御在り坐て天地の底際の内ハ照徹
 らせ御在り坐す御事ハ一も成れりけりハ天上ハ一
 天下ハ一此委無き珍宝ありけるを授け聞えさせ御
 在り坐けるあり然ハ此天津玉を持斎らせ御在り
 坐て天津日継と天津高御座ハ御在り坐す上ハ我が
 天神御子ハ一も天地の間ハ二無くして最高く至尊
 く御在り坐す天照太神ハ相垂て万の物ハ一奉りし
 上と坐て天日ハ御照り坐す限を終御ハ御在り坐す
 天皇尊ハ渡らせ給へる証此ハ在る者ハて外蕃自立
 の酋長あどの係ても及奉るよし所以此ハ在り事

のて可畏ふと申さむも中々あるがごとく一儲右の其
遠岐斯八尺勾瓊鏡及草那藝劍と有て及字を以て界
と為るゆゑあらず其劍ハ一も素戔嗚大神の得て奉
るせ給へり一御物なれば其遠岐斯と云ふ物の列に
ハ非る事本よりありと虽も然云放たるまき事こそ
ハ有けれ傳十九百六十三二百ハ下ハ注るが如く其
御劍ハ一も古語拾遺石戸段ハ今日目一箇神作雜刀
斧及鐵鉞釋古語依と有て此ハ雜刀を作しせる如く
あれども此神と石凝姥神と相共ハ天香山香の眞鐵を
取一天安河の堅石を鐵子床礎と為て相鍛して石凝姥神

ハ件の八咫鏡を作り天目一箇神ハ日矛を作しし
狀ありければ此大御劍も此時ハ造奉ししと見え
通河上天淵記ハ素戔嗚尊奉劍天照太神太神曰我屏
天岩屋時落江洲川伊布貴山是我劍也と有と謂ハ無
一とハ云べうらざるあり且拾遺ハ瑞籬朝段ハ漸畏
神威同殿不安故更令斎部氏率石凝姥神齋天目一箇
神齋二氏更鑄鏡造劍と有も其齋孫をして祖先の事
ハ仕奉るの給ふ御事政ありければ此文を相照して
此神劍の作者此ハ知るとハ非ずや且此時ハ其劍を
ハ其賢木の下枝ハ被著たりけむ落たりけむと思

△因云其遠岐斯
 の斯ハ右ハ云ルガ
 如ク招禱冥マツ
 通ルヲを記傳
 六斯ハ過柱一
 事ト云時ハ詳カ
 リ謂ル過云の
 斯ト云れたれ
 然ルヲ其遠岐
 斯ノ事ハ傳テ九
 卷百廿九丁ハ
 也云リマ

しき由も有ければ此草薙劔も亦其遠岐斯と云ふ列
 あらざりけりとの云べしとざる状あるをも思合す
 可き事あるものを其ハ傳テ九卷百六十九丁三百七
 十九丁ハ景行天皇十二年御紀仲
 哀天皇八年御紀あどを引て注るが如く上代の常と
 して鏡と劔と玉との三を賢木ハ取掛て奉る例も有
 を以之故此三種神宝ハ異説の有て古語拾遺御天
 あり降段ハ即以ハ咫鏡及草薙劔二種神宝授賜皇孫永為
 天皇所謂神宝予玉自從と有ハ其家ハ傳ふる大殿祭
 詞ハ天津釜乃鏡劔ヲ捧持賜天云こと瑞八尺瓊能御
 吹伎五百箇御統乃玉云こと文を分て有ハ子細有
 る事あるを不意に誤りて天皇ハ唯鏡劔の二種のみ

あると思取れる説やて大ハ古義ハ乖けり者あり其
 予玉自從と云ハ彼宝鏡開始章第一書ハ謂ゆる日
 予ハ一ハ咫鏡ハ属る物ありけれハ相從ふ可き事
 本よりある事ハ傳廿一六百七十二丁ハ注るが如
 八百四十一丁ハ注るが如
 此時ハ大己貴神の国避の表物と為て奉るせ給へ
 る平國之廣予と瑞八尺瓊と二種神宝も自天皇の如
 く副賜へりてを以て予玉自從と有けり混れて
 玉ハ彼八尺瓊曲玉ありけり淺く心得て除きたる
 者ありて神代以降天皇と為て誰有て疑を容さる三
 種神宝ハ異説を生したるハ甚し可畏とも何とも言

小断たる事あり。但此小心得有べし記傳十五
二十小此三種神宝を連奉る次第ハ鏡劔玉と鏡玉
三下小此三種神宝を連奉る次第ハ鏡劔玉と鏡玉
劔と有へき理ある小此記小書紀小玉を先小
一書紀小ハ殊小ハ坂瓊曲玉及ハ咫鏡と鏡字上小
及字をさへ置れたるハ如何と云水垣朝御代ハ至
りて此御鏡劔をハ他處ハ齋奉り給ひてより天皇の
御許ハ坐ハ神代よりの舊物ハ坐す唯玉のと今
太御神の授賜へる任の物ハ坐故ハ彼御世より
てハ三種の中ハ玉を第一とぞ為されけむ然れハ其
御世より後ハ常ハ玉を先ハ申習ひたる其次第の任

小此記ハ書紀も記せる者ハ一ハ神代より然ハ
非ずある略と云れハ一ハ實ハ然ハ説ハ一ハ彼遠岐斯
を眞賢木ハ被掛たるも異説の有て委ハハ傳十九
百七十八下廿二百十論へる如く上枝ハハ咫鏡中枝
ハハ八坂瓊曲玉を掛られたり云ハ宝鏡開始章第
三ハ書ハ傳ハれを以て正説と立る事ハ神宮ハ
ハ眞の御鏡此ハ御在ハ坐を以て其説を誤ハず
傳へたるを朝廷ハ右等の所由ハ依て玉を先と為
させ給へる頃より其正書の如く玉を上枝ハ玉鏡を中
枝ハ其位置替りて傳りたる者と聞ゆれば何れハ

△又播磨風土記
 昔大帯日子命
 非印南別業之御
 佩カ之八咫鏡之上
 結ハ八咫勾下結
 尔麻布都鏡繫
 云々有る大帯日
 子命日京行天皇
 の御事あり八咫
 鏡ハ淡ク八咫鏡
 を誤れるあり八咫
 勾ハ八咫勾玉を誤
 れるあり此ハ御
 佩カ之装飾玉
 之鏡を著き
 給へるあれども
 百より右の三種
 ハ親しく相離
 れざる事の證
 者ありけり

しては鏡ハ天照太神の御靈あり劍ハ素戔鳴尊の御
 靈あり皇統の起らせ給へる所以の就てハ甚止事無
 さ御形実ハ渡らせ給へれば鏡劍と云ふ次第ありて
 玉ハ其ハ事異りて天津日繼の表物と為て事依
 奉らせ給へりと思ひき由次百四十ハ注し奉れり如
 くありければ其御形代ハ次べき理あるあり有
 り傳記の右の結の所ハ拾遺を引て云く此拾遺の文
 殊更ハ玉を毀して鏡ハ此ハ難き事を知せ
 文あり自從云ハ鏡劍の如く正しく御筆と為て
 賜へるあり非ざる玉と云ハ唯何と無く其ハ添て賜
 へる由あり云く云ハ唯何と無く其ハ添て賜
 在れハ三種神宝の一ありハ有ければ唯何と無
 く添て賜へると云事何れの古書ハ見えぬ事共

るをや右ハ忌部氏の私説ありハ心も著れずして
 の説ある可きが已く神皇正統記ハ其拾遺ハ依て
 誤りき 諸其天竺の御事ハ傳廿一千 注し徵奉
 れるか如く日向宮ハ初国所知食ハ皇御孫尊より以
 降瑞籬朝廷ハ至るまで同床共殿の神勅を違へさせ
 御在ハ坐す神物官物の美美具具有る事無して御在ハ坐
 りハを其御代ハ至りて漸ハ神威を畏おせ御在ハ坐
 て更ハ鏡劍の二種を造改めさせ給ひ玉ハ天統の御
 筆あるを以て宮中を出し奉らせ給ひ其あり玉鏡劍
 と云ふ次を以て猶同床共殿の御有状ハて御代ハ
 傳承させ御在ハ坐き然れば後世御讓位の御時ハ先

皇より新帝の傳進らせ給ふと云如き際より御事
も御在り坐すべし唯何と無く天統の御坐と為て皇
大宮の傳らせ御在り坐けるあり然るも允恭天皇
前御紀の六年春正月瑞齒別天皇崩爰群卿議之日略中
即選吉日跪上天皇之坐云々見えたる是人臣より
議りて帝位を立る始又天皇之坐を奉ると云事の始
あり此時天皇辞ひて受させ御在り坐さしうは其
元年御紀の妃大中姫命より勸め聞えさせ奉給へる
漸の聞食しうは於是群臣大喜即日捧天皇之坐符
再拜上焉略中乃却帝位と云事見えたるも臣下より

甚も可畏き天皇を奉りて帝位に即せ奉る事ハ神代
より以降初この違例と也申してよし若て顯宗天皇
前御紀の冬十一月白髮天皇五年叙豊青尊前葬葛城埴日丘陵十二
月百官大會皇太子億計王取天皇之坐置之天皇之坐
再拜從諸臣之位曰此天皇之位有功者可以處之云々
と有て弟の顯宗天皇を以て帝位に即しめ奉らせ給
へり右の百官大會と有り兄王の從諸臣之位と有り
允恭天皇の例の如く群臣より天皇之坐を奉る事ハ
准らせ給へるあり右の坐又坐符と書れたるハ唯ハ
天皇の志流斯と申まての事めて西戎の云所とハ別

あれども他も當べき字も無き故に借て被用たるの
之よりして其實ハ右の謂ゆる三種神宝の御事あるハ
申すも更あり右の允恭天皇御紀の通證ハ天皇玺符
也師古曰符謂諸所合符以為契者也瑯邪代薛繡天子
獨以印称玺又獨以玉之注一捧天皇之玺符再拜上の
下ハ九字出史文帝紀と有ガ如ク彼ハ玺と云物ハ天
子の玉印を云ひ符と云ハ合符ハ我朝ハ後ハ契
と云物の出来れる類あれ若て継体天皇御紀ハ天
皇を越前より迎申して樟葉宮ハ令坐奉りて大伴金
村大連跪上天子鏡劔玺符再拜と有て下ハ男大迹天
皇曰大臣大連將相諸臣咸推寡人、敢不承乃受玺
符是日即天皇位と有る玺符ハ右の鏡劔玉を云ふ也

字ハ漢籍より取れたるのこころ有け此事ハ別あり
を以て上あり玺符の字ハ抱るまどき事を知べし然して宣
化天皇御紀ハ勾大兄廣國神武金日天皇崩無嗣群
臣奏上劔鏡於武小廣國押盾尊使即天皇之位焉と有
る此ハ玉を漏されたり此ハ廣國に譲れり推古天皇御紀ハ泊瀬部
天皇賊臣の為ハ被殺給ひて嗣位既空一ウけけれハ
群臣より踐祚の事を請せるハ皇后辞讓之百寮上表
勸進至干三乃從之因以奉天皇玺印中略皇后即天皇位
於豐浦宮と有る玺印ハ印章ハ非ずして三種神宝
あり可き事申すも更あり舒明天皇元年御紀ハ大臣

金光天皇白皇
録中奉天子室
綬神鏡室鏡書
と云引合せ見
ふ八坂瓊

及群卿共以天子之玺印獻於田村皇子即日即天皇
位と有る玺印も石の同じく孝徳天皇前御紀の天
豊財重日足姫天皇授玺綬禪位と有る先帝より新皇
へ被進るめて後の御讓位の御時謂ゆる鏡室渡御
の始とも申べきが如し右の玺綬の綬字和名抄服
玩具の綬礼記注云綬音受和所以女佩玉相受承也又
用組字音と有る字ありけれ典曲玉當七書れたる
可字かけれども此志流斯訓あり所か其実八件の三種神室を云あり持統天皇
四年御紀の物部麻呂朝臣樹大盾神祇伯中臣大島朝
臣讀天神壽詞畢忌部宿祢色史知奉上神室鏡於皇

富家殿御談
小御云神室は是
宮内納印也
と有る印章の如
聞ゆる者か其
ハ唯宮内志流
斯を納せ給ふ
云事あり混ふ
可くす

后、即天皇位公卿百寮羅列匝拜而拍乎焉と見え
ある是が正しく後世の如く八坂瓊曲玉を以て神室
と申す始と見たりける次云ふ所の令條あり
鏡を指して神室と云ふあれ此と別あり又公武令
天子神室謂踐祚之日壽室而不用内印方三寸五
位以上位記及下諸国公文則印と有る神祇令の謂と
ハ別れて是ハ天皇御室の事あり所以ハ踐祚之日の
壽室ハ室として用ひさせ給はすと偕大宝の神祇令
云て其ハ印章非る由を云れたる中臣奏天神之壽詞謂
小凡踐祚之日踐祚位也福也中臣奏天神之壽詞
神代之古事為忌部上神室之鏡謂室信也猶云神明
万壽之室詞也之徵信此即以鏡
所見たる義解の文ハ此即以鏡稱室と有る就
て思ふハ玉ハ先帝より新帝へ内こて渡りせ給ふ

が故の常のハ鏡劔玉の三を神玺と申す事あれども
 此のてハ其玉を除き鏡劔の二を以て神玺と云て此
 時の限て然云事ある由あり若て貞觀儀式の大嘗祭
 辰日儀及踐祚大嘗祭式ハ神祇官中臣捧賢木入自
 儀鸞門東戸就版跪奏天神之壽詞群臣共跪忌部上神玺之
 鏡劔マ有ハ鏡劔を神玺と云事右の令條ハ同トキガ
 即位ハ漢風を多く擬ハセ給ふガ故ト見えて當昔已
 ハ大祀の節會ハ被奉る例ト成てより即位ハ劔玺
 と云て授受の御事御在ハ坐す狀或あるハ鏡ハ常ハ温
 明殿ハ鎮おハセ給ふガ故ハ動クハ奉るまびても非る

續後記(仁明天
 皇嘉祥三年三月ハ
 帝崩於清涼殿云
 實天子神玺宝符
 前鈿等奉於皇天
 子直曹ト有ハ宝
 云ハ鏡劔をハカ
 可ト云
 大上天皇臨皇
 帝位于時天皇五
 條宮親王公
 卿奉天子宝綬神
 鏡宝劔等天皇
 再三詳諫

を以てめり是ハ一ハ沿革あり三代實錄ハ天安二年ハ
文德天皇崩於泉院親成殿云ハ鈿印等於皇太子直曹
 月ハ奉天子神玺宝劔節符光孝天皇元慶八年二月ハ
 奉宝綬宝劔ト有ハ神玺又宝綬ト云ハ右ハ注るガ如
 く玉を云るあれハ此項より大祀ハ鏡劔を奉り踐
 祚ハ劔玺を渡させ給ふ御事トハ成れるありけり
 百練抄三條天皇長和五年正月廿九日但劔玺ハ踐祚
 の御時の之ハ限らず假初の行幸ハ従へさせ給ふ
 例ハて世ハの史籍ハ多在けれハ抄ハ皇有さるを
 一二云ハハ親長卿記ハ宝劔神玺ト云條有テ御劔者
 神代有三劔其一也中略神玺自神代于今不替中略此二夜

御殿御帳中御枕二階上案略中内侍雖持自不取與侍取
 之傳讓位時計取之也此故僧女又上蔭内侍外人不入
 夜御殿白地案朝餉之時不近候也九重輕服人不觸于
 中内侍近衛將外更不觸于也自神代如見我被誓置光
 可敬事也宮中鏡一程物動返不可傾匡房曰不淨人
 不觸于他行之時以内侍令守護又夜御殿火不可消是
 為劔室也以上江と見え建武年中行事六月十一日神
 今食行幸條典侍渡りて御輿を南階小寄す上首の
 典侍劔室の役を勤む云々劔室大床子の上小置く云
 九月十一日例幣行幸條典侍出御の義常の如く内

一珠小建曆御記
 賢所の御事と先
 載り此小室劔
 神室と云條を之
 せ給て古未の神
 室を新造の室劔
 の下書目させ給
 ひ右等の外も下
 語りし香記
 長曆三年の所小神
 室劔の御事と
 置御劔之方用時
 方也仍尋常之時
 置東方御机今儀
 以策登西仍端為
 正也件御劔可置
 西方御机也あ
 見え

侍劔室を持て前後小侍より近衛の次將若く藏人扶
 持云々あど有て白地御許を放たせ御在し坐さ
 常典ふあむ有ける是後ハ八坂瓊曲玉をのこ指
 て神室とも唯小室とも申奉る例を以り云るあり御
 即位次第持劔室劔室劔左と書し親長卿記延徳二年正
 月十六日踏哥節會條左机上置劔室内侍兩人持之
 侍持劔取云々内侍一人持劔一人持室箱云々持燭殿
 室置加之
 上人等前行其次劔内侍次主上次開白令持御裾次室
 内侍と有て何れ御も劔を先と室を後御けられ
 上件徵書せらるが如く三種神室の次第ハ一も鏡劔玉

日本書紀傳三十二
 〇百二十八

ある事愈以て著明き者ありむ有ける三種神宝の御 借又後ハ其
事を事略て神宝宝劔内侍所と申す事常と成れり百
練我壽永二年七月廿五日條ハ内侍所神宝宝劔と有
り東鑑ハ文治元年四月十一日内侍所神宝御坐宝劔
紛失同廿四日賢所神宝令著今津邊御同廿七日自閑
院行幸内大内内侍所自宮朝所渡御温明殿云々神宝
同奉渡せと有て御座所を以て神鏡を内侍所と申奉
め玉をハ字音ハ神借三種神宝の中ハ劔鏡ハ伊勢神
宝と申来れるあり
宮ハ齋奉らせ給ひ劔ハ熱田神宮ハ鎮奉らせ給ひて
今踐祚の御時ハ獻るハ崇神天皇の大御世ハ摸造り
奉らせ給ふ所ありと虽も神代より傳りて世御在し
坐す玉と相並べて天津日繼の御筆と為て受持たせ
御在し坐す状ハ眞の御物と以りも替らせ給ふ御意

味御在し坐さざる事ハて栗山愿ガ保建大記ハ古昔三
器通謂之玉以為祖先之神以為天位之信又以為修己
之具又以為馭天下之器云々故玉以躬擁三器為我眞
主則臣要質鬼神而無疑百世保而不惑と云る實以て
然り如此く為て傳來る事古より一日の如く虚少事
無くふむ有ける也武夫賊臣の爲ハ 一の虚ころハ出来ハけれ増鏡の
御門始り給ひて八十二代ハ當りて後鳥羽院之中す
御在し坐す云々彼新帝安平家の人と引されて迄
ある西海ハ流離し給ひて後後白河法皇御孫の君
遠渡し聞えて見奉り給ふ時三宮を次第の任ハと思

されける小法皇を甚しく嫌奉りて泣給ひければ云
々四宮此ニ在て詔ふ即御膝の上懐り奉り
て甚睦ふしげある御氣しまるれば是ころ實の孫ハ
御在しけれ故院高の兒たいかも目見ふと思え給へ
の甚勞れしして壽永二年八月廿日御年四めて位ハ
即ち給ひけり内侍所神筆室劔ハ讓位の時必渡り奉
ふれど先帝筑紫ヲ率て御在しければ此度始めて
三の神器無し奇くしき例ハ成ぬ可し云々有る是
ふり玉^勝藤間^{山吹}ハ後鳥羽天皇踐祚即位の御事壽永
二年八月新^新主を立奉給ひむ事法皇思食し煩ひて主

上の還御を待奉り可しや將劍室ハ無し之由も新主
を立奉り可しやの由御トを被行けりや神祇官陰陽
寮共ハ主上の還御を待奉給ふ可き由申けり然れど
も猶思食し由有て重て御ト有けり小彼是同りしぞ
る故ハ猶議有て終ハ新主を立奉り可きハ定りぬ
若て高倉天皇御子達の内三宮四宮の内何れと
思食煩ふふ依て又ハ官寮ハ仰せて御ト有けれ
ハ官も寮も三宮有る由を申けるハ女房ハ夢前
有ける由も猶四宮を以ふ思食けるハ又木曾義
仲申^申事有ける故三條宮の御子の加賀國ハ御在し

この中は依て入通
関白根政左大臣右
大臣も御座り
けり何れも被
の御事然り可
さる伏申給ひけ
れども常考其件
申す事措れ難

坐をこりて奉る可ければ又しも御下有ける此度
ハ被夢諭の事依て四宮を第一之宮を第二被
北國の宮を第三之宮と為て令下給へる小宮寮共第一
最吉第一半吉第二ハ始終不快ありけり此ハ形を義
仲ハ被見けるハ我仲猶此御下ハ北國宮を第一ハ被
為ざりける事をあむ憤申ける然れど法皇の御心化
以て終ハ四宮を定奉給ひける云々件の事共ハ明
輪殿の玉海と云記録記されたる存今ハ其意を取て大
化を書せり凡ハ筮者不再三而今度立王之秋添之間
數度有御下神定無靈告歎記されたる信ハ然ら事

あり若て元暦元年七月廿八日即位の礼被行ける此
即位の御事同記ハ返々論有り其大旨ハ止事を得ず
立王之御事ハ有と雖も即位の礼を被行する事ハ至て
ハ三種神宝の御歸京を待給ふ可き事ありとあり其中ハ
不帶劔璽即位之例出來者後代乱逆之基只可在此事
と云語有り此一事千万の黄金も難換く甚もこし
尊くあるむ咎と有ハ然る言ひて増鏡ハ此度始めて三
の神器無て奇き例ハ成ぬ可くと有と同一く當
昔天下の論安りざりし程此を合せ知べき者あり
此と云も法皇の御心漂よりせ御在り坐ける虚ハ衆

て義仲奴ら漫小京城を犯し先帝を逐出し奉るに依
れしは其罪其奴に在り云べし是以て皇祖天神の御
怒共や御在り坐せし終に兼久の乱出来りて三所の
天皇共小賊臣の為に遠島に被移させ給へり其御
罪ありしと申す可らざる又義仲頼朝頼朝義経の
其終を善為せりあるも斯く御響無しと云べし
るごるあり傳州一石返矢の件思合す可し又
書の終に云く法皇は後白河天皇主上の安徳天皇三
宮の守貞親王後高倉院を申す三條宮に仁王後小
高倉宮に申す入道關白の松殿基房公攝政に普賢寺
殿基通公左大臣の輪殿兼安公の書されり即此
玉海記に給へり先月御ト出給ひし驗有て其御事
して三宮守貞の先月御ト出給ひし驗有て其御事

後堀河天皇が天津日繼所知食させ給へり甚し神
慮の程奇異ある御事ありける兼久の乱果て後の
増鏡の彼入道宮の御子の十小成給ふを兼久三年七
月九日御位に即奉る父宮に上り天皇は成り
奉りて法皇の御位に即奉る父宮に上り天皇は成り
の賊徒が世中を揺るがし初たる頃問ふは是より打統
の武臣の為に皇威の衰へさせ^{其の御熱田に御在り坐せし}壽永の乱の宝劔西海
御在り坐せ給へり其も御模造の御物ありし雖も
代り小天津日繼の御筆を傳へさせ御在り坐り来り
せ給ふ御宝に渡らせ給へり三種神宝の一の缺
有る状に成れりける故にや皇威は十七年月の振に
せ御在り坐せ成て終に元亨の乱に成れり其間
小も神器の御座敷度御在り坐せ雖も其御事ハ姑

く措て其後醍醐天皇の延元二年（1333）に至りて賊臣尊氏
が叛逆の時（1333）の光明天皇を立て神器を傳へさせ給ふ
む事を請申ししより新造の劔璽を授させ御在り坐
て天皇ハ潛り傳來の神器を奉りて吉野宮に天下所
知食させ給ふ此を南朝と聞ゆ後村上天皇長慶天皇
後龜山天皇是より此ハ三種神宝を受傳させ御在り
坐て天統を継せ御在り坐せば主張たる天下の大君
あり渡らせ給へるを其新造の神器を傳させ給ひて
武臣より傳り給へる御流を北朝と聞えりよ
終り天統二派に支別れさせ給へり其次ハ崇光天皇

あり渡らせ給へる其觀應三年（1332）ハ南軍の爲り被攻
御在り坐て南朝（1333）朝に遷らせ御在り坐しハ賊臣義
詮が計りしと爲て後光嚴天皇を立奉りけり其時
百官共ハ傳國の神器無くして帝位に即せ御在り坐
む事ハ如何と疑申せりハ良基の關白強て申されけ
るハ方今尊氏を以て宝劔とす臣願くハ神宝ハ當り
て天朝に仕奉むと被申けりハ衆議決りて終り即位
の大礼を行はせ御在り坐けること元暦の例にも超
て甚しき世の禍事あり有けり月輪殿の不帶劔璽即
徳之例出來者後代乱逆之基只可在此事と宣へり

其御子孫と有るが斯る乱逆の事を行ひて賊臣
不侍諛給へる哀れども云へば更なり其より後
圓融後小松の二天皇も^{足利の}賊臣の爲に擁立せし御在
一坐て偽ふるも真ふるも三種神宝と云物無くして
天位に即せ御在し坐けるハ賊臣の爲に依りて云ふ
が皇祖天神の對奉せ給ひても甚く可畏き御事
亦て身毛も強立て怖まじき御事と思ゆるハや良基
又申すハ二條殿の祖後福光院殿の御事あり斯る當
意即妙の宝劔神宝を新し作らせ給へる功に依りて足
利氏の思之此止無く御在して悟り北條の西園寺家
に於るが如く累代親戚成て其子満基公より以て未
天下の貴族と仰がる振録の御家の在るが足利
氏の諱の一字を載りて家臣の利に令耻され給ふ

をさへハ天下に誇りし御流の成果ハけり是全
く万代に違例を傳させ給へる御功と云ハハ御
罪もや申斯のけり三種神宝を持齋せ御在し坐
けりハ神祇の眞正一天地に相對へて天津日繼高御
座の御次ハ南朝の御方ハ御在し坐けるを其後角山
天皇の御代元中九年壬申北朝ハ後小松天皇明徳
三年ハ當りて大内義弘六角満高と武士を南朝ハ上
りて和睦の事を令請奉給ひけるハ勅許の御事御在
し坐て大覺寺宮ハ行幸爲させ御在し坐けるハ威儀
具備ハハハ北帝ハ中も更なり將軍義満も也
來降の礼ハ御在し坐せる由を詰り聞えけるハ天

皇其使を召出させ御在り坐て朕親しく三種神器を
傳させ御在り坐せば位號の繫る所甚重き理あり乃
の君を以て子と爲て神器を傳させ給ふ可しと詔給
へるに依て已に其和議始と破れむと爲けるに満高
此を諫めて南帝の詔理致明白なり神器を奉下て御
在り坐せば南帝とるは眞天子の御在り坐せられず
其詔命の逆奉りせ給ひむと聞えける任に満高
を奉りて和議を謀りせ給ひけり事成りくば其五
日と云ふ天皇より後小松天皇の三種神器を傳進し
せられたり是御讓位の義あり故に後小松天皇の

尊号を奉りせ給ひて終に天下統一統の御世と愛た
く成れるなり此御天降の際に當りて掛あぐも甚
も可畏き天照坐皇太神の大命以て宝祚之隆當與天
壤無窮者矣と詔給へる御事を證させ御在り坐て此
三種神器を授奉りせ給へる中にも寶鏡は皇太神の
御靈と爲て吾御前を拜くが如く齋奉れと詔給ひ宝
劍は此素戔嗚大神の御靈を係せる神物なり在り
れは此二種が天神御子の天下の大君と御在り坐す
信物なり御在り坐けるを其神靈と聞えさす玉ハ
も右のこの御靈宝は事異りて天津日繼の御靈

古事記云此所云
天照太神高木神之
命以詔太子正勝吾勝
等天忍穗耳命今
平記等保中國之白
故隨言依賜降坐和
知者之有也

小御在坐けり須更坐御許を離れ坐御在坐
計りけり神宝ふて渡り給へる故に他所に齋
奉りせず神代ありの御物にて凡て三種共不同
床共殿ふして歴世受傳へさせ御在坐可神宝
神代の御定違ひせ御在坐可神器の傳ひ
御方ふび疑も無く天神御孫傳可御在坐
渡り給ひけり栗山氏説若夫秦以帝印為漢國
聖書同無異而至秦惟天子稱聖而臣下不得稱身豈可
與吾邦百王授受三種經一之道蓋同年而語故至以
躬擁三器為我真正則臣等贊鬼神而無疑而世以俟其
人而不惑之云れ信然言也西戎謂也
傳國の玉宝あり天地の天照太神勅曰の勅字ハ
懸隔の差有る者ありけり

古事記云此所云
天照太神高木神之
命以詔太子正勝吾勝
等天忍穗耳命今
平記等保中國之白
故隨言依賜降坐和
知者之有也

美許登能理志氏之訓也○若然者の若字訓べり
志加良波之訓也此は母志之云時は猶危ぶませ給
ふ義り成し上件二神の慥に復奏されたる趣を訓
へればあり○吾兒ハ私記ハ安加古字之訓れども古
事記ハ我御子正勝吾勝速日天忍穗耳命之見え
又ハ此葦原中國者我御子之所知國言依所賜之國也
あど外多在りが何れも我御子と有る訓を取べし
○當降ハ私記ハ安末久太之万豆良年之有る此ハ其
天降し奉り給ふ天神の御方より詔ふあり○將降
間ハ安万久太利万左年止須留安比多尔之有る此ハ

古事記傳 三十二
○百三十六

口部第一一書小
謂の服御之物
是なり

今事記同段云天皇
登幸葛城山之時
百官人等悉皆著
紅紐之青指衣服
彼時有共自新向
之尾登山上大驚
天皇之國情亦其
裝束之状及人衆
相似不似

其天降也御在坐むと為る天忍穗耳尊の御上を
申する古事記ハ爾天照太御神高木神之命以云
其太子正勝吾勝と速日天忍穗耳命答曰備將降
裝束之間子生出有て御答て御詞と為り此裝束と云
事ハ傳三十九百六十八古事記ハ伊弉諾神紋ハ自出雲將
上坐倭國而束裝之時と有る所云と云ふ云むハ
雄略天皇元御紀ハ大臣裝束已畢進軍門推古天皇二
十年御紀ハ五月五日藥獵之集于材田以相連考趣於
朝其裝束如菟田之獵天武天皇十年御紀ハ行宮既畢
裝束既備あど多し此ハ既ハ天降也御在坐むと

爲て其御用意の御在坐ける間も申す教あり○
皇孫己生の皇孫ハ天照太神の皇祖とて渡りて給へ
る事對し此けむ事傳卅一二十四下ハ注る如くあり
可しと雖も此を須賣美麻と申奉る時ハ天下を統御
すと云義ハ當れハ木代まで天皇尊と申奉る尊号
ハ別ある事無きを其上此ハ御父天忍穗耳尊の御言
ふれハ美古と訓ざりてハ聞えず第一一書ハ時居
於虛天而生兒と見え古事記ハ子生出と見えたりけ
れハ次ハ以此皇孫と有る殊更りて此ハ皇子と訓
奉る可き所ありけり己生と私記ハ須五爾阿礼万志

奴と有り奴を都に改む可し次ある此皇孫に有り古
有小合せて美古と訓し且小事記小此子應降也
己小天皇小成一奉二所三ふれハ須賣美麻あり可一
○有奏ハ申給布事有理と訓べし此文法四神出生章
第十一書小時泉守道者白云有言矣云し是時菊理媛
神亦有白事云しと有小似たり右の有言矣又有白事
と云ハ謂ゆハ奏請の義あるが此も其如くして口訣
不忍穂耳尊請而降獲々符尊也と有る實然る言ふ
の故古事記ハ此を此子應降也と奏給入る事見え
下ハ是以隨自之云しと書されたり奏請ハ云事ハ後
の條あり奏請義解ハ謂奏而請其報ハ有る是
あり傳十三卷六十八下八十七下見る可し○代降

ハ加閉以降志奉良年と訓し即第一書ハ因欲以此
皇孫代親而降と有ハ天忍穂耳尊ハ奏請せ給ふハ
てハ無く皇祖天神ハの御計ハの趣あり故ハ代
親ハハ有る代ハ云例ハ其一書ある大己貴神の御
言ハも乃薦岐神於二神曰是當代我而奉從也と七所
見たり枕冊子六下ハ右衛門佐信方ハ云し筑前守失
小ハ代りハ成ハ小ハこハ實ハ云けハ小ハ違ハいハずハと聞
えハハハ榮花御賀ハ源ハ少將實基ハ差ハれハたりハつハか
俄ハ惱ハ心ハ事ハ有ハて得舞ハ成ハめハる代ハ召ハされハたりハあり
小ハ源氏神ハ十六ハ御匣殿ハ二月ハ尚待ハ成給ハひハめ

院の御思ひ小即厄小成給へる人の代ありけり新勅
撰雜三小恒徳公右兵衛佐小侍のけり代の以將成
侍りてあど有り新古今衣傷あり禎子内親王隠れ侍
りて後信子内親王代り居侍りぬ
聞し又源氏棟柱卷廿八下御返り此小得聞え
し書思く思いたれど麻呂聞ひて代り傷痛
や云○故天照太神云々其天忍穂耳尊の奏請せ給ふ
事依り制可給ひ先小天忍穂耳尊小事依り給へる
事如く瓊々杵尊小更めて太命を科せ給へる所あり
右百廿二
此小大味り可き事り有けり已り引り方
車記小尔天照太御神高木神之命以詔太子正勝吾勝
速日天忍穂耳命今平訖葦原中國例之日故隨言依

賜降坐而知看之云小隨言依賜小其初履小天照太御
神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子
正勝吾勝々速日天忍穂耳命之所知國言因賜而天降
也と有を以て其如く此小詔給へるなり然して
尔其太子正勝吾勝々速日天忍穂耳命答白僕者將降
裝束之間子生出名天迹岐志國迹岐志天津日高日子
者能迹之藝命此子應降也と有、其御子を以て全降
ひと奏請せ給へる由右小注すが如く次小是以隨白
之科詔日子者能迹之藝命此豐葦原水穗國者汝所知
國言依賜故隨命以可天降と有る隨白之、其奏請給

へるを制可させ御在り坐て瓊々杵尊小命負せ給へ
る由あり此の汝所知國言依賜と有る石曰天忍穗耳
尊の此子應降也と申給へるが即其尊より瓊々杵尊
へ言依奉らせ給へる御事と成れるなり故隨命と
御父天忍穗耳尊の命小隨ひて天降り坐るなり
右百十下注の如く先小御命を蒙りて給ひて以
降り天忍穗耳尊高天原小御在り坐るなり此國土
の大君にて渡らせ給ふが故小其御父子の御間あり
天^天紀授受の御政に御在り坐るなり御計曰皇祖天
神の行はせ給へる由あり我も大由心著ぬ事あり

一を如此く説得て見ると時天照太神より天忍穗耳
尊小天忍穗耳尊より瓊々杵尊小次第の任り天津日
繼高御座の大御業を授け聞えさせ給へる趣甚鮮明
小知るる事あり然れども右の科詔と有る天忍穗耳
尊より御言依の御事御在り坐ける小就て天照太神
より大命を負せて其大御父天忍穗耳尊より聞えさ
せ給へる大命の隨小物為給ふ可き由を殊更小聞え
させ給へるなり有ける若て其下小於是副賜其遠岐
斯云いと云ひ五伴緒神を分加させ給へるなり此
一言も同く皇祖天神の御計にひるる事申すも更

あり 其科詔ハ記傳十五卷下下美許登流富世氏也
訓へハ流富世ハ令負の意なり仰又課ふども意
ハ同ト負ハ持ト同トハ令負持テ其處の政を行
せト云ハ寧ろ云ト詔命ヲ負持テ其處の政を行
故の名ありト意味ハ同ト云レタリ續紀第一詔
現御神止大島國所知倭根子天皇俊賜比負賜布貴
支高支廣支厚支大命ヲ受賜利ト坐五倍比天忍穗耳
ト有テ負賜布ハ應へテ受賜利ト有テ備此天忍穗耳
尊ハ終小天降り御在ト坐ズト止ぬ御事如何
ある御事如何詳る小ト雖も今推量奉る小ト是傳
廿二 四百三 小注ふか如ク宝鏡開始章第三三書あり
素盞鳴大神の辞見の御言ハ吾以清心所生兒等亦奉
於神ト奉させ給へるハ二柱御祖神中り受奉りせ給
へる天下國土を此天忍穗耳尊ハ屬ク奉り皇太神

の御計ハ小任セ奉給ふ由ありけりハ主張ト天下
國土を紓御めさせ給ふ大君ハ天地の間ハ獨此天忍
穗耳尊ヲ御在ト坐ける是以テ此一書ハ天照太神曰
豐葦原中國是吾兒可坐之地也古事記ハ天照太神
神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子
正勝吾勝々速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降
也ト有テ天降了せ御在ト坐ける小其時ハ此國ハ未
平ふらざりしかバ還上ルセ給ハ給ハ本下ル止事
を得させ給ハ給ハ御事然る小其後平國の御政
御在ト坐て己ハ此國ハ平安ハ成れりト云ハ己尊も

天降_りせ御在_り坐_{けり}御装束の御事多_し御在_り坐_{けり}間_ふ御子生出_させ御在_り坐_{けり}其御子を率_て降_りせ給_ひむ_と聞_えさせ給_ふ可_し其御子を代_て天降_りさせ給_ひむ由を奏請_{させ}給_へる皇祖天神の大御心小違奉_りせ給_ひ阻_み今_も御支度此御心小外_ふ物為_りせ給_ふ如_くなる皇祖天神其請_ふ依_せ給_ひ其御政を更_に改_めさせ御在_り坐_て瓊_の行_尊を天降_りさせ給_ふ御事不成_れ年頃不審_{しく}思渡_つる今其説を多_く得_れり其不瑞珠盟約章第三_一書_の日神與素盞鳴尊臨天安河而

相對乃立誓約曰_中略如生男者予以為子而今治天原也_と有_て下_ふ其素盞鳴尊所生之皆已男矣故日神方知素盞鳴尊元有赤心便取其六男以為日神之子使治天原と見え宝鏡間始章第三_一書_の於是素盞鳴尊誓之曰_中若有清心者必當生男矣如此則可以使男御天止_と有_が如_く天照太神素盞鳴尊共小男御子を坐せ_り天原を令治_むと誓_給へ_り御言驗有_て神隨小天上_ふ留_まりせ給_ふ可_し御運又_も成_れる_も其例_は天照太神日神小_て渡_りせ給_へる_も二柱御祖神の何_も不生_ず天下之主者歟と相議_りせ生奉_りせ給_ふ

へりし其所以不因て高天原を所知者つと本此天下
皇太神の國土を顯見蒼生も亦皇太神の御民
るが如し故其所由不依て天穗耳尊の天上不留守
せ給へるのいふ事天穗日命其子天夷鳥命を降
して天上不留守せ給ひ天津彦根命其子天目一箇
神を降して天上不留守せ給ふ状不所見たり右不六
男も有れども實ハ三神不坐す由傳十五丁。不注
る如くある不以為日神之子冷治天原也云不御誓約
の此不至りて其信驗遣りて給ひざるあるも奇異すと
も靈しく妙ありけり御幽契不御在り坐ける然此

ハ天忍穗耳尊より瓊杵尊へ次第の任不授聞えさ
せて天降し奉りて給へる事返りて俗不云不嫡孫兼祖
か如し或説不吾勝尊の御心不吾降り不於て王事
監つる可き事と思召て其徳の皇孫不及給めを知
食て瓊杵尊不讓給ひたるを如此隱語たり云
と我が皇學の徒と雖も其見解の此不及ハざる限り
の心當不何彼と説ハ成す同く其然有る事の
本を推定めざる者不五十歩百歩の違ひの
八坂瓊曲玉宝鏡開始章不掘天香山之五百箇真坂樹
而上枚懸八坂瓊之五百箇御統其第三一書ハ中枝
懸以玉作遠祖伊弉諾尊兒天羽玉所作八坂瓊之曲玉
と有る是れ依て古事記ハ此不遠岐斯八尺勾璽と
見えたり是れ亦此事傳十九百七十一丁二注せるが

△即建曆御記云神
至自神代字不替
自神代如我神
其置元可敬事也
宮中鏡一程物動返
不可領と言させ
給へ鏡一程物とい
大抵八咫鏡計の重
さあり可し御こと
玉あり故お願奉ら
し時轉ひ動せ給ふ
由あり字み神代
より今日至るまで
玉体を離れさせ給
はる甚しと神宝
あり渡りせ給へり
けり

如く備瓊玉を御坐て為て被進り之例ハ八洲起元章
第一一書ハ天神謂伊弉諾尊伊弉册尊曰有豊葦原千
五百秋瑞穂之地宜汝往循之迺賜迺賜天瓊戈と見え
古事記ハ是天神諸命以詔伊弉那岐命伊弉那美
命二柱神修理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言
依賜也と見えたる天瓊戈ハ其正書ハ瓊玉也此云努
と注され玉を著たる矛あるが此ハ其用玉と矛と
の二ハ係此のト雖も其天神の大命の狀ハ此國土を
修理固成させ御在り坐て所知者べき御事依の御坐
りて賜はせたりし御事なり次ハ同記天照大御

神の御生坐けり所ハ此時伊弉那岐命大歡喜詔吾者
生生子而於生終得三貴子即其御頭珠之王緒世由良
迹取由良迦志而賜天照大御神而詔之汝命者所知高
天原兵事依而賜也故其御頭珠有謂御倉板奉之神と
所見たり此ハ伊弉諾伊弉册二柱御祖神より天照大
神ハ高天原を所知食せと軍依り奉らせ給へり大御
坐と為て其御頭珠を授奉らせ給へりなり然して其
御頭珠と聞ゆりハ謂ゆりハ坂瓊曲玉あり事申すし
更あり其後ハ瑞珠盟約章第一一書ハ素戔嗚尊將昇
天時有一神号羽翔王比神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲

玉故素戔鳴尊持其瓊玉而到之於天上也又有傳十
七三才注云如く此ハ御父大神ハ昇天の御事を
願奉らせ給へるを勅許して其玉を為て天照玉神を
以て令賜給へる者あり然るハ其時ハ天照太神謂素
戔鳴尊曰以吾所備之劍今當奉汝汝以汝所持之八坂
瓊之曲玉可以授乎矣如此約束共相換取之有ハ五男
三女神の生出させ給へる御事ハ有れども此ハ自
幽深ヲ致有て素戔鳴尊ハ玉を奉らせ給へるハ自
然ハ其生坐傍御子を以て國土を所知しめ奉給ハ御
玉の心ハ通ハ天照太神ハ劍を劍賜ハせるハ素戔

鳴尊ハ劍を奉給ひて天津日繼の定おらせ給ハ基
必此ハ勿胎たる御事之伺ハるめり然して右ハ謂
ニ柱御祖神ハ天瓊戈を賜ハせたり御事の結ハる
此ハ在へりゆ其瓊ハ玉あり戈鋒ハ劍あり此ニ
物を以て五男三女神ハ此ハ成出させ御在ハ坐
天津日繼の定させ給ハ所以ハ縁の事ハ非ず備又
古事記ハ大己貴神の素戔鳴尊の御所ハ御在ハ坐て
即取持其太神之生大刀與生弓矢及天沼琴而逃之
時云々ト有る天沼琴ハ一ト玉を以て饒れる御琴
ハ其天神の呼謂其大穴牟遲神其汝所持之生大
刀生弓矢以而汝庶兄弟者追伏坂之御尾亦追撥河之
瀬而意礼為大國主神亦為宇都志國玉神而其我之女

須世理毘賣為嫡妻而云々見えたる生大刀生弓矢
ハ荒振神を撥平給ふ料あり天沼琴ハ其須世理毘賣
命を后神と爲て大國主神と御在り坐す璽ハ主と
ハ玉ハ就たる御言依ある者あり若し此第一書ハ
大己貴神の吾將自_レ此避去即躬披瑞之八坂瓊而長隱
者矣と有ハ傳廿九_{六十一}廿一_{四百九十七}ハ注
ク如く此時天神御_ハ國土を避奉_ル給へ信ハ
置給へ_ハ大倭大神の御靈マ齋_ル御在り坐す
ハ尺瓊是あり此神の礼寶を奉_ル給へ_ハ例と
成て出雲神賀詞ハ白玉_能大御白髮坐赤玉_能御阿加

良_能坐青玉_能水江玉_乃行根_ハ明_御神_登大八島國所
知_能食天皇命_能手長大御世_云見えたる是を以
て大己貴神の瑞_ハ坂瓊を奉_ル給へ_ハ御心あり著
明_クの_ハ其_ハ白玉赤玉青玉を云ハ緒ハ貫通_ハ九
玉の種類を云_ハ謂ゆる八坂瓊曲玉の状ある_ハ
白玉_能大御白髮坐_ハ後釋ハ御白髮生給ふ_ハ御命
長く坐_ハむ_ハ云意あり_ハ有_ハ如_ク赤玉_能御阿加良
毗坐_ハ考_ハ御病_ハ御在_ハ坐_ハ天御顔の榮え坐_ハ
色_ハ詢_ハたり他の祝詞ハ赤丹徳_ハ聞食_ハ云_ハ同
ト云_ハ後釋ハ阿加良毗_ハ赤_ハむ_ハ云_ハ同_ハ豊明

尔明坐（註）云も同意ありと云れたるが如し青玉能水
 江玉（行）の考ふ水の借字にて維（ミ）しきあり江玉（註）後
 釋（イ）小可愛玉あり行相と緒（イ）小貴たる玉と玉と相並
 び著れし所を云ふと云れたる借玉と玉と行合ふ時
 互（イ）小光を發（イ）す此を以て其明（イ）らるる義を以て明
 御神と續け手長大御世と申すも玉緒の長さより係
 て文を成せるあり神乃（イ）礼自利臣能礼自と云は其神
 の礼實の例の擬ひて臣の礼實を奉る由あり然れば
 大己貴神の國土を避奉りせ給ふ御筆と爲て瑞八尺
 瓊を置て奉りせ給へりし御言を傳へたりし者とこ

予思えられ其謂ゆる瑞八尺瓊ハ大倭神社注進狀（小）
 現（イ）カ心經言天下之地建（イ）得大造之績在大倭豊秋
 津国守國家因号曰倭大國魂神亦曰大地主神以八
 尺瓊為神体奉齋焉と有る是なり即古語指遺小玉
 自（イ）後之有る瑞八尺瓊と此時の廣茅とあり玉（イ）天
 不（イ）る此瑞八尺瓊と可（イ）し由備國土を事依り奉る
 右百十二下注せるが如し
 也給ふ大御筆と爲て鏡氣瓊を進りせ給へりし大御
 政（イ）更（イ）し申す大己貴神の國土の御時小天神御
 子小奉りせ給へるも廣茅と八咫鏡と瑞八尺瓊との
 三種の在り若て天皇の御遠征ふどの御事御在り坐
 下御時ふど小背叛者の其地を奉りて歸順奉る信小
 も亦其三種を奉る事上代より定式と見えたる行

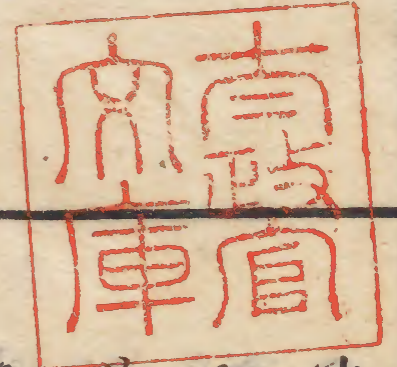
天皇十二年御紀神夏磯媛か歸德か所か則拔磯津山
賢木以上枝挂八握劍中枝挂八尺鏡下枝挂八尺瓊云
之有り仲哀天皇八年御紀小岡縣主祖熊罴聞天皇
車駕豫拔取百枝賢木以立行立九尋船之舳而上枝挂白
銅鏡中枝挂十握劍下枝挂八尺瓊參迎于周芳之沙磨
之浦而献魚鹽地之見又筑紫伊觀縣主祖五十迹手聞
天皇之行拔取五百枝賢木立于船之舳艦上枝挂八尺
瓊中枝挂白銅鏡下枝挂十握劍參迎于此門引島而献
之因以奏言臣敢所以献是物者天皇如八尺瓊之句以
曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山河海原乃提是十握劍

乎天下矣天皇即美五十迹手曰神籙志之見也此
五十迹手在美伊籙志之詔給へる、神代の故
事を以て壽詞申せし依てある可し此時の御事を
神皇系圖小天照皇太神誓曰吾日太子如八尺瓊之句
以曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山川海原乃提神
籙乎天下焉肆以名之三種之神也と書せるい若く
ハ右の御紀の文より抄出たる者々ども思ひしごと
も其文ハ然る事ども有べけれど其五十迹手が奏
せるが實ハ皇太神の御言を以て壽詞へ申せし事
決かれが其を此の取て皇太神の三種神宝を授奉し

懸

世御在し坐し大御肯をも思ふ可き御事此
 宝鏡開詔始天口事書神宣實録出たり何れ
 異し書ありけし信の可く雖も右五
 迹が奈せし所を以て然し有むり聞取事あり
 昌准右天照太神午持三種宝器口傳三句要道其日
 月俱照天照太神不持者也宣へる三句要道此を
 指て云る可し實天下を保有たせ給ふ可き要又
 幽深其致不故其如八尺瓊之句以曲妙御宇之云
 不御句を説奉り試す八尺瓊の事傳十五百
 十七二十二注せるが如く皇太神宮儀式帳八尺
 綬も有八尺八強尺玉を貫通ねたる其丈尺
 の長き事を云る右引たる古事記即其御頭珠
 之玉緒母由良迹取由良迦志而賜天照太御神而有

其玉緒長瓊を打延て瓊コウカす状此八尺の
 義此依て見玉あり如八麻賀礼流賀如久訓て
 謂ゆる八尺瓊曲玉八環無端之云が如く貫連ねたる
 緒の末を一小紆る故曲れる義を以て曲玉之云
 ふ其句れる如くと云其終る所を知ずと云意有
 り彼宝祚之隆當天壤無窮者矣神勅を此寓て
 見奉り知べし所あり曲妙御宇私記小太陸年安
 女乃之太字志呂志女世有て曲妙の字を多聞と
 訓也たり此言ハ神世七代章小清陽者薄靡而為天之
 云小對文ハ精妙之合樽易と有て其清陽有る物を精



妙ありと云ひ欽明天皇十三年御紀に佛と云物の事
 小被欺させ給ひて朕從昔來未嘗聞得如是微妙之法
 と有る微妙を右の精妙と同トく訓い皇極天皇二年
 御紀に巫覡等が争陳神語入微之説と有る入微を多
 同那流と訓い古今集序の山邊赤人と云人有けり歌
 小靈しく妙ありけり源氏若菜上ニ下下小口の物音調
 へくれたるは妙小面白く靈靈きまで響くると有て
 物の至深深くして言ふも詞の盡し難き所有を妙と
 云ふなり然して此玉の句れは如何なる所を以て
 曲妙とい詔給へるると深く遠く思慮を奉るは八

